

「カンダ・サンユッタ」の主題(2)

羽矢 辰夫[※]

はじめに

『サンユッタ・ニカーヤ』の「カンダ・サンユッタ」において主に説かれているのは、文字通りカンダ（蘊、集まり）に関する教説である。筆者がとくに注目したいのは、ドゥッカ（苦）をそのなかに含む、いわゆる「無常・苦・非我」説がさまざまな形式で説かれている点である。従来はその部分だけを取りあげて解説ないし説明するだけで、十分な考察はなされてこなかった。「カンダ・サンユッタ」に説かれる教説を細かく精査することで、ドゥッカの意味や「無常・苦・非我」説との関連を、より幅広い文脈のなかで捉えなおし、より明確にしたいと考えている。第1章に説かれる教説については、すでに考察を済ませた¹⁾。本稿では第2章と第3章について、教説を整理して考察を加えていきたい。なお、とくに言及する場合を除いて、説法者は世尊である。

1 第2章「無常」の概要

第12経 無常

「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は無常である。〔現在の色・受・想・行・識はいうまでもない。〕このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第13経 苦しみ

「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は

苦しみである。〔現在の色・受・想・行・識はいうまでもない。〕このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第14経 非我

「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は非我である。〔現在の色・受・想・行・識はいうまでもない。〕このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第15経 何であれ無常であるもの(1)

「色〔・受・想・行・識〕は無常である。何であれ無常であるものは苦しみである。何であれ苦しみであるものは非我である。何であれ非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。

このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第16経 何であれ無常であるもの(2)

「色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。

※ 青森公立大学教授

何であれ苦しみであるものは非我である。何であれ非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。

このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第17経 何であれ無常であるもの(3)

「色〔・受・想・行・識〕は非我である。何であれ非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。

このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第18経 原因(1)

「色〔・受・想・行・識〕は無常である。何であれ色〔・受・想・行・識〕を生起させる因も縁も無常である。無常であるものから生じた色〔・受・想・行・識〕がどうして常住であろうか。」

第19経 原因(2)

「色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。何であれ色〔・受・想・行・識〕を生起させる因も縁も苦しみである。苦しみであるものから生じた色〔・受・想・行・識〕がどうして楽しみであろうか。」

第20経 原因(3)

「色〔・受・想・行・識〕は非我である。何であれ色〔・受・想・行・識〕を生起させる因も縁も非我である。非我であるものから生じた色

〔・受・想・行・識〕がどうして我であろうか。」

第21経 アーナンダ

「どのようなものが消滅すると、消滅といわれるのですか。」

「アーナンダよ、色〔・受・想・行・識〕は無常である。作られたものである。縁って起こったものである。滅尽する性質のものである。衰滅する性質のものである。消失する性質のものである。消滅する性質のものである。それが消滅すると消滅といわれる。」

2 第2章「無常」の教説の整理と考察

以下で使用する記号は筆者が独自につけたものであり、つぎのような意味を表わす。

(A) 我見 (B) 我執 (C) 欲望 (D) 変化や変異(無常) (E) 愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じる

(a) 我見がない (b) 我執がない (c) 欲望がない (d) = (D) 変化や変異(無常) (e) 愁い・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みが生じない (f) 修行 (g) 解脱、目覚め、さと

第12経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の無常が説かれる。

(D) 「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は無常である。〔現在の色・受・想・行・識〕はいうまでもない。」

(f) 「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する(vimuccati)。」

(g) 「解脱すると解脱したと知る(vimuttasmiṃ vimuttam iti ñāṇaṃ hoti)。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第1章第9経が、「色〔・受・想・行・識〕は無常であると見て、厭い、染まらず、滅するために修行する」ところまでの言及であるのに対して²⁾、ここでは、「色〔・受・想・行・識〕は無常であると見て、厭い、染まらな

る。解脱すると解脱したと知る」として、結果にまで言及している。結果とは解脱ということである。また、解脱すれば、解脱したことを知るといふ。すなわち、「生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない」と知るのである。

第1章では、無常であり、苦であり、非我である色〔・受・想・行・識〕に対する我見や我執や欲望があることによって生じる苦しみを滅するために修行するのであった。したがって、それと整合性をつけようとするれば、解脱とはそのような苦しみからの解脱であり、解脱を知るといふことも、そのような苦しみからの解脱を知るといふことである。

「生まれは尽きた」といふことも、「そのような苦しみが生まれることが尽きた」、あるいは「そのような苦しみを生ぜしめる原因（我見や我執や欲望）が尽きた」という意味に解釈するのが妥当であろう。また、苦しみを滅するために修行するのであるから、滅するのは第一義的には苦しみである。あるいは苦しみを生ぜしめる原因として想定されている色〔・受・想・行・識〕に対する我見や我執や欲望が減するともいえる。原因が減しなければ、結果としての苦しみも減しないからである。

一方で、伝統的には「生まれ」は輪廻における誕生を意味し、その誕生が尽きることが輪廻からの解脱であると解釈されてきた。その場合、滅するのは色〔・受・想・行・識〕そのものである。新たな色〔・受・想・行・識〕はもはや出現しないと考えられているからである。また、輪廻を苦しみとして捉えるならば、輪廻からの解脱が苦しみからの解脱となり、表現上は前述の「苦しみからの解脱」と同じになってわかりにくくなる。この場合、苦しみが意味する内容が異なることに注意しなければならない。とりあえず、実存苦と輪廻苦として区別しておこう。（輪廻の原動力が我見や我執や欲望と考えられていれば、違いはもっとわかりにくくなる。）

（1）苦しみを滅する＝苦しみからの解脱＝実存苦からの解脱——色〔・受・想・行・識〕に対する我見や我執や欲望を滅する

（2）苦しみを滅する＝苦しみからの解脱＝

輪廻苦からの解脱＝輪廻からの解脱——色〔・受・想・行・識〕を滅する（＝色〔・受・想・行・識〕に対する我見や我執や欲望を滅する）

実存苦からの解脱は体験的に実証できるものである。これまで苦しんでいた状態が、そのまま続いているのか、あるいは軽減されているのか、それとも安らぎが得られたのかは、みずからの内面に鋭敏であれば、だれにでも理解できるものである。

しかし、輪廻苦からの解脱ということになると、だれにでも理解できるとは思われない。そもそも輪廻それ自体がどのようなメカニズムで機能しているのかが解明されてはいない。ここでも、「色〔・受・想・行・識〕について厭い、染まらないと解脱する」とあるが、この解脱を輪廻からの解脱と解釈すると、なぜ染まないと輪廻から解脱するのが理解できないであろう。神話的フィクションの世界で輪廻が想定されていて、そこで解脱の意味が規定されているのであれば、それなりの意味をもつと考えられるが、確かめようのないことに関しては議論できないという立場にたてば、ほとんど意味をもたないと思われる。

第13経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の苦が説かれる。

（D？）「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。〔現在の色・受・想・行・識〕はいうまでもない。」

（f）「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。」

（g）「解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

ここでの「苦」が「苦しみ」という意味であるか、「思うようにならない」という意味であるかは、第1章第10経の場合と同じ議論になるであろう³⁾。それ以外は第12経と同じである。

第14経では、過去・未来・現在の色〔・受・想・行・識〕の非我が説かれる。

(a)「〔過去・未来の〕色〔・受・想・行・識〕は非我である。〔現在の色・受・想・行・識はいうまでもない。〕」

(f)「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。」

(g)「解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第12経、第13経、第14経でまた、「無常」「苦」「非我」が個別に説かれている。方法論としての無常観、苦観、非我観が説かれていて、それぞれが同じ解脱という結果をもたらすようである。その一方で、苦を「思うようにならない」と解釈すれば、無常であり、思うようにならない「色〔・受・想・行・識〕」は非我であり、我ではない、と見ることがまず説かれ、そのように見て、厭い、染まらないように〔修行すると〕、解脱という結果がもたらされる、と述べているようでもある。

第15経では、色〔・受・想・行・識〕の「無常・苦・非我」がこの順序で、因果の条件関係として説かれる。

(Da)「色〔・受・想・行・識〕は無常である。無常であるものは苦しみである。苦しみであるものは非我である。」

(b)「非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。」

「無常」と「苦」と「非我」が個別にではなく、一連の因果の条件関係として説かれている。個別であれば、それぞれを方法論としての「無常観」「苦観」「非我観」として見ることができる。しかし、三つが関連づけられて述べられていて、最後に「非我であるものは・・・」と見るべきことが説かれているのであるから、この場合、無常と苦は非我への導入と考えるべきではないかと思われる。

また、無常であるものは苦しみである、苦しみであるものは非我である、という理由ははっ

きりしない。無常そのものは苦しみでも何でも無い、ということがすでに第1章で説かれているからである⁴⁾。この問題に関しては、無常であるものは「思うようにならず」、「思うようにならない」ものは非我である、と解釈できれば、解決されるように思う。

「これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではない」とありのままに正しい智慧によって見るべきなのは、非我であるものについてだけである。無常や苦については、「これは・・・」と述べていないことに注意すべきである。

(f)「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。」

(g)「解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

第16経では、色〔・受・想・行・識〕の「苦・非我」がこの順序で、因果の条件関係として説かれる。

(Da)「色〔・受・想・行・識〕は苦しみである。苦しみであるものは非我である。」

(b)「非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。」

(f)「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。」

(g)「解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

苦しみであるものは非我であるという理由がはっきりしないのは、第15経と同じである。またここでは、無常という項目がなくても、一つの教説として成立している点に注意しておきたい。

第17経では、色〔・受・想・行・識〕の非我

が説かれる。

(a)「色〔・受・想・行・識〕は非我である。」

(b)「非我であるものは、これはわたしのものではない、わたしはこれではない、これはわたしの我ではないと、このようにこれをありのままに正しい智慧によって見るべきである。」

(f)「このように見て、聖弟子は色〔・受・想・行・識〕についても厭う。厭うと染まらない。染まらないので解脱する。」

(g)「解脱すると解脱したと知る。生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない、と知るのである。」

無常や苦という項目がなくても教説として成立しているのは、非我がこの教説の本質であるからなのではないか、と推察される。

第18経、第19経、第20経では、色〔・受・想・行・識〕が無常であり、苦であり、非我である根拠を示そうとしているが、論理そのものが破綻している。

第21経は、「どのようなものが消滅すると、消滅 (nirodha) といわれるのですか」というアーナンダの問いに答えたものである。

(D)「アーナンダよ、色〔・受・想・行・識〕は無常である。作られたものである。縁って起こったものである。滅尽する性質のものである。衰滅する性質のものである。消失する性質のものである。消滅する性質のものである。それが消滅すると消滅といわれる。」

消滅とは、色〔・受・想・行・識〕についていっている、ということなのであろうか。「作られた (saṅkhata)」「縁って起こった (paṭicca-samuppanna)」ということばが他と比べて異質にみえる。

3 第3章「荷物」の概要

第22経 荷物

「荷物とは何か。それは五取蘊であるというべきである。五つとは何か。色〔・受・想・行・

識〕という取蘊である。荷物を運ぶ者とは何か。それは人であるというべきである。かくかくしかじかの名前、氏姓をもち、寿命をそなえた者である。

荷物を背負うこととは何か。およそこの渴愛は再生するものであり、喜びと貪りをとめない、そこそこで大きな喜びをもつものである。すなわち、欲望への渴愛、生存への渴愛、虚無への渴愛である。荷物を降ろすこととは何か。同じその渴愛を残らず消失し、消滅し、捨て、放棄し、解脱し、執着しない〔ことである〕。

世の中で荷物を背負うことは苦しみであり、荷物を降ろすことは安楽である。

渴愛を根もろともに引き抜いて、欲がなく、寂静である、と。」

第23経 あまねく知ること

「あまねく知られるべきものとは何か。色〔・受・想・行・識〕があまねく知られるべきものである。あまねく知ることとは何か。貪りの滅尽、怒りの滅尽、愚かさの滅尽、これがあまねく知ることといわれる。」

第24経 あまねく知って

「色〔・受・想・行・識〕をよく知らず、あまねく知らず、染まることを離れず、捨てなければ、苦しみを滅尽することはできない。色〔・受・想・行・識〕をよく知り、あまねく知り、染まらず、捨てれば、苦しみを滅尽することができる。」

第25経 欲望と貪欲

「色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と貪欲があれば、それを捨てなさい。そうすれば、その色〔・受・想・行・識〕は捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものとなるであろう。」

第26経 味わい(1)

「わたしが目覚める以前に、まだ正しく目覚めていないボサツのままであったとき、わたしはつぎのように思った。色〔・受・想・行・識〕

の味わいとは何か。〔色・受・想・行・識〕の患いとは何か。〔色・受・想・行・識からの〕離脱とは何か、と。

何であれ色〔・受・想・行・識〕に縁って生じる楽しみや喜び、これが色〔・受・想・行・識〕の味わいである。何であれ色〔・受・想・行・識〕は無常であり、苦しみであり、変化する性質のものであること、これが色〔・受・想・行・識〕の患いである。何であれ色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲を制御し、欲望と食欲を捨てること、これが色〔・受・想・行・識〕からの離脱である。

わたしはこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、神々を含み、マールを含み、ブラフマー神を含む世界のなかで、沙門・バラモンを含み、神々や人間を含む人々のなかで、わたしは無上の正しいさとりに目覚めた、とはじめていったのである。

そしてまた、わたしに知見が生じた。「わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生まれである。もはや再生することはない」と。

第27経 味わい(2)

「わたしは色〔・受・想・行・識〕の味わいを探求した。わたしは色〔・受・想・行・識〕の味わいを証得した。色〔・受・想・行・識〕の味わいのかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。わたしは色〔・受・想・行・識〕の患いを探求した。わたしは色〔・受・想・行・識〕の患いを証得した。色〔・受・想・行・識〕の患いのかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。わたしは色〔・受・想・行・識〕からの離脱を証得した。わたしは色〔・受・想・行・識〕からの離脱のかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。

わたしはこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、神々を含み、マールを含み、ブラフマー神を含む世界のなかで、沙門・バラモンを含み、神々や人間を含む人々のなかで、わたしは無上の正しいさとりに目覚め

た、とはじめていったのである。

そしてまた、わたしに知見が生じた。「わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生まれである。もはや再生することはない」と。

第28経 味わい(3)

「もしも色〔・受・想・行・識〕に味わいがなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕に執着しないであろう。しかしながら、色〔・受・想・行・識〕に味わいがあるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕に執着するのである。もしも色〔・受・想・行・識〕に患いがなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕を厭わないであろう。しかしながら、色〔・受・想・行・識〕に患いがあるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕を厭うのである。もしも色〔・受・想・行・識〕からの離脱がなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕から離脱しないであろう。しかしながら、色〔・受・想・行・識〕からの離脱があるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕から離脱するのである。

人々はこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、神々を含み、マールを含み、ブラフマー神を含む世界の〔なかの〕、沙門・バラモンを含み、神々や人間を含む人々ははじめて離脱し、束縛を離れ、解脱し、解放された心でいられるのである。」

第29経 大きな喜び

「色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ぶ者は苦しみをとおいに喜ぶのである。苦しみをとおいに喜ぶ者は苦しみから解放されない、とわたしはいう。

色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない者は苦しみをとおいに喜ばないのである。苦しみをとおいに喜ばない者は苦しみから解放される、とわたしはいう。」

第30経 生起

「何であれ色〔・受・想・行・識〕が生起し、存続し、再び生起して現われるということ、それは苦しみが生起し、病気が生起し、老いと死

が現われるということである。

しかしながら、何であれ色〔・受・想・行・識〕が消滅し、寂滅し、滅するという、それは苦しみが消滅し、病気が寂滅し、老いと死が滅するということである。」

第31経 痛みの根源

「痛みと痛みの根源について話そう。色〔・受・想・行・識〕が痛みである。およそこの渴愛は再生するものであり、喜びと貪りをともない、そこそこで大きな喜びをもつものである。すなわち、欲望への渴愛、生存への渴愛、虚無への渴愛である。これが痛みの根源といわれる。」

第32経 壊れるもの

「壊れるものと壊れないものについて話そう。色〔・受・想・行・識〕は壊れるものである。その消滅、寂滅、滅が壊れないものである。」

4 第3章「荷物」の教説の整理と考察

第22経では、色〔・受・想・行・識〕（五取蘊）という荷物を背負うことと降ろすことが説かれる。

（C）「荷物を背負うこととは何か。およそこの渴愛は再生するものであり、喜びと貪りをともない、そこそこで大きな喜びをもつものである。すなわち、欲望への渴愛、生存への渴愛、虚無への渴愛である。」

（c）「荷物を降ろすこととは何か。同じその渴愛を残らず消失し、消滅し、捨て、放棄し、解脱し（mutti）、執着しない〔ことである〕。」

（CE）「世の中で荷物を背負うことは苦しみであり、」

（c e）「荷物を降ろすことは安楽である。」

（c）「渴愛を根もろともに引き抜いて、」

（c e）「欲がなく、寂靜である。」

色〔・受・想・行・識〕（五取蘊）に対して渴愛があると、喜びはともなうが、けっきょくは苦しみもたらされると考えられている。色〔・受・想・行・識〕に対する渴愛を消滅し、捨て、解脱し、執着しないと安楽であるという。渴愛

を根もろともに引き抜いて、再生しないようにすると安らかでいられるのである。ターラ樹の譬えと関連させると、根もろともに引き抜かれて消滅し、再生しなくなるのは渴愛である。

第23経では、あまねく知ることが説かれる。

（C）「色〔・受・想・行・識〕があまねく知られるべきものであり、貪りの滅尽、怒りの滅尽、愚かさの滅尽があまねく知ることである。」

色〔・受・想・行・識〕に対する貪り、怒り、愚かさを滅尽すべきである、とっているようである。「知る」という概念について注意が必要であろう。

第24経では、苦しみを滅尽することが説かれる。

（E）「色〔・受・想・行・識〕をあまねく知らず、染まることを離れず、捨てなければ、苦しみを滅尽することはできない。」

（e）「色〔・受・想・行・識〕をあまねく知り、染まらず、捨てれば、苦しみを滅尽する（dukkhakkhaya）ことができる。」

苦しみを滅尽するために、色〔・受・想・行・識〕に染まらず、捨てることが説かれている。また、「知る」ということも説かれる。第23経を参照すれば、色〔・受・想・行・識〕に対する貪り、怒り、愚かさを滅尽すれば（知れば）、苦しみは滅尽される、ということになるであろう。

第25経では、ターラ樹の譬えが説かれる。

（c）「色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と貪欲を捨てれば、その色〔・受・想・行・識〕は捨てられ、根が断たれ根なしにされたターラ樹のように、存在しないものにされ、未来に生じないものとなるであろう。」

根なしにされたターラ樹のように存在しなくなるのは、文脈からは色〔・受・想・行・識〕そのものである。それ以前に、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望はすでに根が断たれていると考えるべきであろう。欲望を捨てるとは、第26経によると離脱することといわれる。未来に生じないとは、色〔・受・想・行・識〕そのものが輪廻において再生しないという意味であ

ろう。輪廻の原動力が色〔・受・想・行・識〕に対する欲望ということであれば、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望を捨てること（＝離脱）が色〔・受・想・行・識〕そのものを捨てることとなり、文意は理解できる。

第26経では、色〔・受・想・行・識〕の味わい、患い、離脱が説かれる。

（C）「色〔・受・想・行・識〕に縁って生じる楽しみや喜び、これが色〔・受・想・行・識〕の味わいである。」

（D）「色〔・受・想・行・識〕は無常（anicca）であり、苦しみ（dukkha）であり、変化する性質のもの（vipariṇāṇamadhamma）であること、これが色〔・受・想・行・識〕の患いである。」

ここでは、「無常・苦・変化する性質のもの」という組み合わせが現われる。「無常・苦・非我」説との比較対照が必要であろう。

（c f）「色〔・受・想・行・識〕に対する欲望と食欲を制御し、欲望と食欲を捨てること、これが色〔・受・想・行・識〕からの離脱（nissaraṇa）である。」

これから考えると、第25経は離脱を説いていることになる。

（g）「わたしはこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、わたしは無上の正しいさとりに目覚めた、とはじめていったのである。」

五取蘊の味わい、患い、離脱を知ることが、さとりに目覚めた、すなわち、ブッダになった、と語っている重要な資料である。

（g）「そしてまた、わたしに知見が生じた。「わたしの心の解脱（cetovimutti）は不動である。これが最後の生まれである。もはや再生することはない」と。」

心の解脱とは何か。何が何から解脱するのか。「最後の生まれ」とは、欲望が生まれるのが最後ということか、あるいは輪廻における最後の生まれなのか。再生しないとは、渴愛が再生しないということか、あるいは輪廻における再生がないという意味なのか。解決すべき問題は多く

残されている。

第27経では、色〔・受・想・行・識〕の味わい、患い、離脱を探究し、証得し、智慧によってよく見たことが説かれる。

（C）「わたしは色〔・受・想・行・識〕の味わいを探究した。わたしは色〔・受・想・行・識〕の味わいを証得した。色〔・受・想・行・識〕の味わいのかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。」

（D）「わたしは色〔・受・想・行・識〕の患いを探究した。わたしは色〔・受・想・行・識〕の患いを証得した。色〔・受・想・行・識〕の患いのかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。」

（f）「わたしは色〔・受・想・行・識〕からの離脱を探究した。わたしは色〔・受・想・行・識〕からの離脱を証得した。色〔・受・想・行・識〕からの離脱のかぎりを、わたしは智慧によってよく見たのである。」

（g）「わたしはこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、わたしは無上の正しいさとりに目覚めた、とはじめていったのである。」

（g）「そしてまた、わたしに知見が生じた。「わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生まれである。もはや再生することはない」と。」

色〔・受・想・行・識〕の味わい、患い、離脱を探究し、証得したこと、それらのかぎりを智慧によってよく見たこと以外は第26経と同じである。

第28経では、色〔・受・想・行・識〕の味わい、患い、離脱の存在意義が説かれる。

（C）「もしも色〔・受・想・行・識〕に味わいがなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕に執着しないであろう。しかしながら、色〔・受・想・行・識〕に味わいがあるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕に執着するのである。」

（D）「もしも色〔・受・想・行・識〕に患いがなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕を厭わないであろう。しかしながら、色〔・受・

想・行・識」に患いがあるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕を厭うのである。」

(f)「もしも色〔・受・想・行・識〕からの離脱がなければ、人々は色〔・受・想・行・識〕から離脱しないであろう。しかしながら、色〔・受・想・行・識〕からの離脱があるがゆえに、人々は色〔・受・想・行・識〕から離脱するのである。」

(g)「人々はこれら五取蘊の味わいを味わいとして、患いを患いとして、また離脱を離脱としてありのままに知ったので、はじめて離脱し、束縛を離れ、解脱し (vippanuttā)、解放された心で (vimariyādikatena cetasā) いられるのである。」

この経では、輪廻を想起させるような表現は用いられない。一方で、心の解放感は強くうかがわれる。味わい、患い、離脱に対応するのは、執着、厭い、欲望を捨てる、である。

第29経では、色〔・受・想・行・識〕を喜ぶ者と喜ばない者とが説かれる。

(CE)「色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ぶ者は苦しみをおおいに喜ぶのである。苦しみをおおいに喜ぶ者は苦しみから解放されない (aparimutto)、とわたしはいう。」

(ce)「色〔・受・想・行・識〕をおおいに喜ばない者は苦しみをおおいに喜ばないのである。苦しみをおおいに喜ばない者は苦しみから解放される (parimutto)、とわたしはいう。」

解放され、解脱するのは苦しみからである。それが輪廻苦か実存苦かはわからない。

第30経では、色〔・受・想・行・識〕の生起と消滅が説かれる。

(E)「色〔・受・想・行・識〕が生起し、存続し、再び生起して現われるということ、それは苦しみが生起し、病気が生起し、老いと死が現われるということである。」

(e)「色〔・受・想・行・識〕が消滅し、寂滅し、滅するという、それは苦しみが消滅し (nirodho)、病気が寂滅し (vūpasamo)、老いと死が滅する (atthagamo) ということである。」

色〔・受・想・行・識〕が生起することが苦

しみが生起することであると説かれ、その苦しみは病気や老いや死と同置される。また、色〔・受・想・行・識〕が滅することが苦しみの滅であり、それは病気や老いや死の滅であるともいわれる。

第31経では、痛みと痛みの根源が説かれる。

(E)「色〔・受・想・行・識〕が痛みである。」

(C)「およそこの渴愛は再生するものであり、喜びと貪りをとめない、そこそこで大きな喜びをもつものである。すなわち、欲望への渴愛、生存への渴愛、虚無への渴愛である。これが痛みの根源といわれる。」

渴愛があれば、色〔・受・想・行・識〕は痛み〔をもたらすもの〕となる、ということなのであろう。

第32経では、壊れるものと壊れないものが説かれる。

(e)「色〔・受・想・行・識〕は壊れるものである。その消滅、寂滅、滅が壊れないものである。」

色〔・受・想・行・識〕が滅することの意味が述べられている。

小 結

第2章では、修行の結果としての解脱に言及している。さらに解脱知見も、「生まれは尽きた。清らかな修行は完成した。なされるべきことはなされた。この状態のほかはない」と表現されている。輪廻からの解脱をうかがわせるような表現であるが、第1章における実存的な苦しみからの解脱との関連が追究されるべきであらう。

また第2章では、「無常」と「苦」と「非我」が個別にではなく、一連の因果の条件関係として、この順序で説かれている。無常と苦は非我への導入と考えられなくもない。そうではあるが、無常であるものは苦しみである、苦しみであるものは非我である、という理由ははっきりしない。無常そのものは苦しみでも何でもなし、ということが第1章に説かれているからである。

「苦」を「苦しみ」ではなく、「思うようにならない」という意味に解釈すると、無常であるものは思うようにならない、思うようにならないものは非我である、となり、無常と苦と非我との関連がはっきりする。

第3章では、五取蘊の味わい、患い、離脱を徹底的に探求した結果、目覚めが得られたとしている。経典の記述に補足を加えながらまとめると、五取蘊を味わいとして楽しみ、喜ぶことはできるけれども、執着が生じることは避けられない、しかも色〔・受・想・行・識〕は無常であり、苦しみであり、変化する性質のものであるから、欲望が完璧に満たされることはなく、けっきょくは患いとなる、患いから離脱するためには、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望を制御ないし捨てる必要があり、色〔・受・想・行・識〕に対する欲望を制御ないし捨てることでできれば心の解脱が得られる、ということになるであろう。この場合の「苦しみ」も「思うようにならない」という意味に解釈する方が、文脈全体の流れはよいように思われる。

「色〔・受・想・行・識〕は無常であり、苦しみであり、変化する性質のものである」というフレーズと「無常・苦・非我」説との関連に注目していきたい。色〔・受・想・行・識〕は壊れるものであり、色〔・受・想・行・識〕の消滅が壊れないものである、と説かれるのは、壊れるものである色〔・受・想・行・識〕に対する欲望を滅したときに得られる、壊れないものによる安心感ではないか。

また第3章では、目覚めないし解脱における知見がつぎのように述べられる。「わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生まれである。もはや再生することはない」と。より輪廻を想起させるような表現になっている。第1章、第2章との関連がさらに追究されるべきである。

色〔・受・想・行・識〕に対する欲望を捨てるのが色〔・受・想・行・識〕そのものを捨てることであるかのような記述がある。また、色〔・受・想・行・識〕の生起は苦しみの生起であり、それは老死の生起でもある、色〔・受・想・行・識〕の消滅は苦しみの消滅であり、それは老死の消滅であるとも説かれる。個の内面である苦しみの生起や消滅が、個の外面である色〔・受・想・行・識〕の生起や消滅と混同されているように思われる。あえて両方の解釈ができるように表現しているのかもしれない。

(2013年12月2日受付、2014年1月14日受理)

註

- 1) 拙稿「『カンダ・サンユッタ』の主題(1)」『青森公立大学紀要』18-1・2、2013年3月、21-30ページ。
- 2) 同上、24、29ページ。
- 3) 同上、29ページ。
- 4) 同上、25ページ。